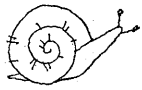
幼児の創造性

堀合文子



ものを考えてつくるということは、人の一生に大切なことで、社会の第一歩である幼児期に創造性を培っておくことは、そのひと個人にも、社会人としても大事なことでしょう。

創造性を培う経験

幼児期にはもちろん、創造性を養うことは無理でしょうが、生来の創造性というものは個人個人みんな異なった状態でその人の中に存在しています。現に、幼稚園という場へくると、個人個人創造性を発揮してあそびの生活を営んでいます。幼児が自発的に生活する時こそ、それは盛んで私共はその活動をさまたげないように環境をととのえ、充分に発揮できるようにし、そして後に刺激を与えたり、材料を提供したり、助言をしたりしてそれをより伸長させるように努力しています。

四月入園してきた時は、その創造性は、首ももたげないように奥にしまわれていた幼児も、幼稚園生活によって一年後、二年後、三年後には、目をみはるような創造性が発揮できるのです。

幼児の生活は、一つ一つが創造なので、手を洗うことから、積木その他のおもちゃであそんだり、紙に絵を画いたり、物をつくったり、音楽にあわせて体を動かしたり、また砂場であそんだり、みんなみんな、そこには小さい小さいが創造性を働かせて生活をしているのです。

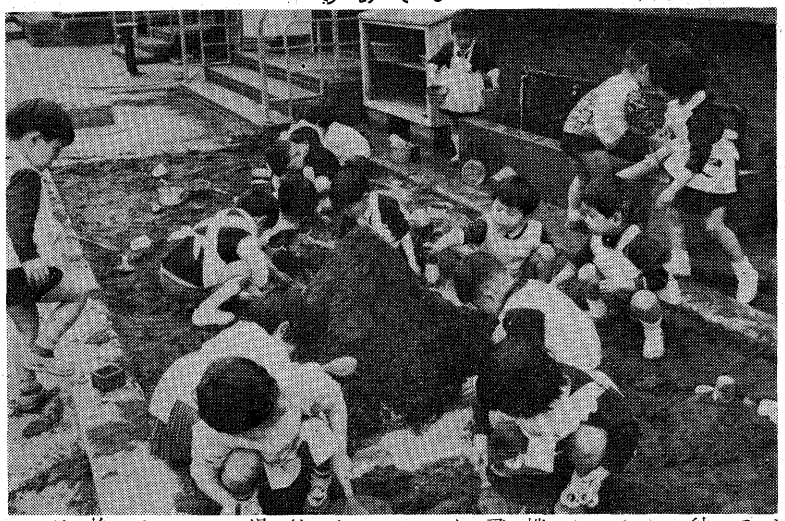
模倣から出発したもの、経験から出発したもの、とそれはいろいろあるでしょう。しかしよくよく観察してみるとそこにはすばらしい創造があり、刻々と創造性が培われているのです。換言すれば、幼児の生活は、経験と創造の連続繰り返しともいえるでしょう。絵をかかせたり、物をつくらせたり、音楽にあわせて体を動かしたり、これももちろん創造性を培うよき経験であることはいうまでもありませんが、積木でいろいろ積んでつくる。砂場でどろんこあそびをしたり、おだんごつくりをしたりするのも、またウルトラマンごっこをしてあそぶのも大切な創造性を培う場として私どもはおろそかにしてはならないことです。

幼児の創造の生活

例㈠（四歳五月下旬）「いつものようにブロックで、ジェット機、飛行機、〇〇型、宇宙船などなどつくり、部屋の一隅でつくったり、でき上がると次は部屋の中を爆音すさまじく飛ばしてあそんで

いた。そのうち〝先生紙ちょうだい〟と紙をとりにきた。飛行機をつくるとのこと。そのうちに紙の飛行機が数台できていた。他のことにかまけて数分後に彼らをみにいくと今までのブロック製の飛行機も紙製の飛行機も影も形もなくて、そこには積木でつくられた格納庫と飛行場ができていた。だまって観察していると、格納庫の扉が開きブロック製のジェット機が出発していった。格納庫の中には数台の飛行機が紙飛行機と共に整頓して並んでいた。

砂あそび



例㈡（四歳七月頃）「あいかわらず、砂場あそびは盛んで、おだんごつくり、山つくり、ごちそうつくりから最近はダムのようなものをつくり、水を流してはあそんでいる。積木戸棚の片隅に古くなったふるいがあまり今までは使われないでつまれていたが今日は実に有効に使われている。砂をやや積みあげたところにふるいをはさむようにおき、そこへ水を流す、また川のようなところへもそのふるいをはさみ水を流すたびにそのふるいを通って流れる。」

例㈢（三歳後期より連続四歳現在）「三歳の頃はかたいおだんごをつくろうと、砂の上に庭の隅のふきだまりの乾燥した土をつけていたが、今だにおだんごつくりは連続し、〝どうしたら硬くなるだろう〟とくふうしてはまねしあって、水をちょっとつけては砂をつけ、また土をかけまたちょっと水をかけ、また砂をかけ。それでもまだだめでライン引につかう石灰がこぼれていたのをみつけ蟻のようにその粉をたどっておだんごにかけ、これも水、砂、土と交互に長時間くりかえし、物置からちょろちょろでては水をつけ砂をかけ、また物置の粉へと、まるでねずみのように夢中でくりかえし、午前中一ぱいおだんごつくりに精をだすことが何日か続く。その中にじょうぶというのは小さい方がよいとわかったのか、また芯は砂ではだめで土がよいというのがわかったのか、山の土を小指の先位にまるめておだんごつくりがはじまった。（四歳二学期）毎日帰る時

は自分のおだんごの倉庫がほうぼうにあり大切な宝物として大事にしまっておく。また明日朝はやくそっと宝物をのぞき、満足そうにながめる。そしてまた続きをしたり他のあそびもする。」

例㈣（四歳三月）「雨があがって晴れてきた朝、〃まだ部屋の前には大きな水たまりがある。〃先生外へでていい〃〃いいわよ水たまりにはいらないようにね〃しばらくして部屋の前をみると、その水たまりに黄色、水色、ピンクの、美しくかわいい舟が浮かんでおり、小さいかわいい手で波をおこして走らせている。その舟は牛乳のセロファンの上紙の中に牛乳の蓋がはいって浮かんでいる。牛乳をのむとき、取ったままの状態で浮かんでいる美しいかわいい舟なのだ。私も僕もと同じ舟がたくさん浮かび朝の光にかわいい影を水にうつしていた。」

水たまりの舟

例㈤（四歳二月頃から）「元気よく幼児体操をすると列をつくって庭を行進するのが大すきだ。今日も美しい行進の音楽が流れて一まわりして先頭が部屋へたどりつき行進はおわった。〃さあかたづけて帰りましょう〃音楽はまだ流れている。〃せんせーい〃声のする方をみると音楽にあわせて五、六人の女の子が、自由にたのしそうにおどっている。輪になって手をつなぎスキップでまわったり、ばらばらにスキップでいって手を自由に動かしたり、たのしそう

音楽にあわせて

におどっている。私もおもわず手拍子をうった。」

例(一)(二)(三)は幼児が自分たちのあそびの中であそびの必要性、発展性のためにそこで考え、くふうし、つくりだしているので日常の生活の中に小さいことから大きいことと、私ども教師がおどろくような場面がよくみられます。

例(四)(五)は日常の幼児の経験、絵をかいたりものをつくったり、音楽にあわせて体を動かしたりする、いわゆる教師が意図して計画したことの経験からくる創造の表現で、ある程度幼稚園生活を経験してきた後にみられます。

いろいろつくってあそぶ

創造性の指導

幼児の生活をこうして一年たった今、ふりかえってみる時、幼児は常に思考し創造しています。また、教師の与えた経験は微力だが小さいことも積み重ねて幼児の中に大きな力となってあらわれてくるということを、幼児のつくることにしても、動くことにしても、あそぶ日常の生活にしてもみな表現されてくることを思う時、おどろきとともにおそろしくもなります。

○幼児の日常の生活を観察し、その創造性が小さい平凡なことでも見のがさず育ててあげる。

○幼児は自分の経験を再現している中に、創造ということに変化してくるので、教師の計画による経験を豊富にし、適切な経験をさせるように考える。

○環境を常にととのえる。これは平凡なことだがおろそかにしない。

○教師が常に創造性を養い、教師の能力を錬成することを忘れない。

幼児は刻刻と成長しています。一年をふりかえると同時に、以上四つのことを考えてみました。創造性を養うということはまだまだ幼児期にはいえないことで、教師が助言をしたり、刺激を与えたり、のぞましい経験を豊かにさせることによって、幼児の中にある創造性を引き出してそれを培わねばなりません。それは私ども教師の役目でしょう。培われる創造性が個人個人の成長に即して、大きな役割を果たしてくれるよう、また新しい学期とともに努力いたしたいと思います。